
Luna phone

靈刀村雨丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Luna phone

【Nコード】

N4471P

【作者名】

霊刀村雨丸

【あらすじ】

もし、幻想郷に、携帯電話があつたら・・・

これはそんな話。月の姫と人の形が織り成すストーリー

（前書き）

この小説はほとんどが会話文で構成されています。

「・・・・・・・・本人

」・・・・・・・・通話相手

お間違えの無いよう。

どこかにあるといわれる『幻想郷』。今日も、幻想郷では元気に妖怪たちが飛び回っている。

これは、そんな幻想郷のある夜のお話。

幻想郷のある場所『迷いの竹林』の中にある建物、『永遠亭』。そこに住みし姫、蓬莱山輝夜。今、彼女は永遠亭の中の一室にいた。

「はあ……………」

溜息をつきながら兎をなでている。顔はうかない。

「妹紅…………大丈夫かな……………」

それは今日のことだ。いつもの通り蓬萊人、藤原妹紅と喧嘩をしていた。しかし、頭にきて神宝『ブリリアントドラゴンバレッタ』の出力を大きめにしてしまい、やり過ぎたのだ。

「今日はちょっとやりすぎちゃったから・・・・・・・・・・今頃苦しんでいるかも・・・・・・・・・・」

そういつているうちに記憶が蘇る。

「だ、だって妹紅ったらあの半獣と一緒に来るもんだから私やきもち・・・・・・・・・・」

輝夜は自分の発言に動揺し、慌てて言いなおす。

「いや、別にやきもちとかじゃなくて、その、こっちは一人なのに向こうは二人だから不公平というか・・・・・・・・・・」

「輝夜っ」

そう言って入ってきたのは月の賢者、八意永琳。どうやら輝夜の独り言の一部を聞いていたらしい。

「全く………お茶でも飲んで落ち着きなさい。」

と言って、お茶の入った湯飲みをお盆に持って来てくれていた。

「えーりん……………」

そう呟いて、輝夜は思う。

（そ、そうよね。別に心配しなくたってすぐに再生できるんだし………それにあの半獣もいるからきつと……………ん？）

お茶をおいたお盆にはもう一個物がのっていた。

「ケータイ……………」

輝夜は顔を上げる。

「えーりん……………」

八意永琳は何も言わず部屋の外に出て行ってしまった。自分が一人になる時間をくれたのだ。永琳の気遣いである。自分のすべきことを悟った輝夜は、

「ん？誰だろこんな時間に……………」

ここは迷いの竹林の中にある藤原妹紅の家。部屋で包帯を巻いていたところ、いきなり携帯が鳴り出した。ちなみに着信音は「竹取飛翔く Lunatic princess」のアレンジ。

一応携帯が鳴っている事だし、妹紅は出ることにした。

「もしもし？」

『もしもし！？妹紅かしらはん！？』

「……………輝夜？」

『そ、そうよ！輝夜よ！蓬萊山輝夜よ！』

「・・・・・・・・・・落ち着け・・・・・・・・・・って言うかいったい何の用だよ。さっき会ったばかりじゃないか。」

『あ、ああ、そうね。その・・・・・・・・・・元気にしてるかなーと・・・・・・・・・・』

「・・・・・・・・・・いや、お前にやられたんだから元気なわけないだろ・・・・・・・・・・いつもはそんなこと言わないじゃないか。」

『いや・・・・・・・・・・その・・・・・・・・・・』

永遠亭。

「き、今日はちょっとやりすぎたかな〜と思って……………」

『あ？まあ確かにいつもよりは激しかったけど、もうだいぶ回復したしそれに……………』

輝夜は聞いた。

『慧音が手当てしてくれたからね』

携帯電話機を持ちつつ輝夜は思う。

（やっぱりあの半獣と仲いいんだ・・・・・・・・私なんて間に入り込めないほどに・・・・・・・・）

自分の思考がネガになって行くのに気づいた。

（ハッ、だめよ私・・・・・・・・あきらめちゃ。ちゃんと関係をはつきりさせないと・・・・・・・・）

顔が火照るのが自分でも分かる。意を決し聞く。

「そ、そのけーねって半獣、あんたの知り合い？なんかずいぶん仲いいけど・・・・・・・・そ、その・・・・・・・・あ、あんたとは、ど、どういう関係なのかしら？」

『は？いや、ただの友達だよ。私のことを理解してくれる数少ない存在だ。まあ、なんていうか・・・・・・・・』

輝夜は妹紅の声を聞いた。

『大切な人だよ』

（「大切な人」……そう、きたのね……えーりんから教わった、「究極の殺し文句」を使う時が……）

しかし、やっぱり、

（どうしよう……うまくいかないかもしれない……
いや！だめよ！弱気になっちゃ！もう……）

待つてばかりはいや！

「そう、大切な人なのね……あなたにとって……
そ、それじゃあね、あの……その……わ……
……わ……」

輝夜は妹紅に問う。

「わ、私とけーね、どっちが大切な」

『慧音』

即答だった。

妹紅は輝夜に言う。

「いやあたりまえだろ．．．．．お前私の仇だぞ．．．．．」

『．．．．．ぐす．．．．．えぐ．．．．．』

「？」

自分の、何かがふっ切れてしまった。

「ふええゝん！」

『え？ちょ、輝夜！？何でなっているんだよ！？』

「だって・・・・・・・・だって・・・・・・・・」

永琳が言っていたことを思い返す。

（永琳「妹紅が少しでも戸惑うようだったら脈アリです。」

輝夜「脈アリ？」

永琳「あなたに気があるということよ。」

輝夜「えーーーー！！！」

って言ってたのに、戸惑うどころか言い切る前に即答なんてもう
絶望的だよー！！！）

「いや、慧音は大切だけど、だからといってお前が嫌いってわけじゃないくて、いや確かに憎んでいるけど……」

妹紅は言う。

「えーっと、その、慧音は友人として大切だけど、お前はそれとは別次元っていうか、友人以上って言うか、その……つまり……」

「お前には一生私と付き合ってほしいと思っているんだ！」

妹紅の断言を聞いた輝夜。

「え．．．．．？そ、それって．．．．．」

恐る恐る聞いてきた輝夜の声は

『プロポーズ？』

．．．．．

「ち、違う違う！付き合うつてのはそういうことじゃなくて、その、蓬萊人として生きていくにはお前が必要であって、だからお前とは同じ時間を過ごしていたいんだって．．．．．」

うまく言葉がまとまらない。

「まあ確かにプロポーズみたいなもんだけど………でもそれとは違って、あゝ、もう！要するに！」

「私はお前のことをかけがえのない大切な存在だと思っているんだ！」

涙で顔が赤くなつた輝夜が言葉を漏らす。

「妹紅……………」

今なら・・・

今なら言える気がする・・・

妹紅は輝夜の言葉に耳を傾ける。

『私・・・妹紅のこと・・・』

その時、急に妹紅の家のドアが叩かれた。

「！」

「妹紅、入るぞ」

声の主は

「け、慧音！？あ、そういえば飯作ってくれるって言ってたっけ・・・」

妹紅に何かがあったらしい。

「ど、どうしたの？」

『い、いや、ちょっと来客みたいだ・・・』

「・・・もしかして・・・半獣？」

『いや、ちがう！断じて違う！竜神に誓って違う！』

「そ、そう・・・・・・・・・・ならいいけど・・・・・・・・・・」

（結局言えなかったな・・・・・・・・・・）

と、思いつつ、

「それじゃ・・・・・・・・切るね・・・・・・・・」

『あ、か、輝夜！』

呼び止める妹紅。

『そ、その、もう少しゆっくり話がしたいから・・・・・・・・』

『あ、明日またこっちから電話してもいいか?』

「え．．．?」

思いもかけない言葉だ

「妹紅．．．．．」

返事はもちろん、

「うん」

（後書き）

「つながりたい相手は誰ですか？」

こんにちは、靈刀村雨丸です。またしても短編。しかも今回は書きやすかった。

唐突ですが、いつでも『つながる』相手がいるのは人生で最も良いことの一つです。私はほぼいないのであまり言えませんが、自分が辛いことがあったとき、嬉しいことがあったときに話したり相談したりできる人がいるのは幸せな人です。

よくメールとかありますがこれはまだ『つながって』いるとは思えません。意思疎通の手段の一つです。これは感情抜きで対話をしている為、相手がどのような気持ちでいるのか分かりません。それに一回送って、返信が来て、また送って、など同時に話すことが出来ません。

要するに私が言いたいのは『大切な人』を作って下さい、ということです。間違っても俺みたいな人にはなるな。そういうことです。

では、私はこの辺で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4471p/>

L u n a p h o n e

2010年12月18日20時55分発行